入選

「ありがとう」の一言で

長野県　第六中学校
３年　池田万桜

皆さんはだれかが困っているのを目にしたとき、迷わず助けることができますか。みんながあこがれる優しくて誰からも好かれる主人公ならきっと、何の迷いもなく助けにいくのでしょう。しかし、私は人に親切をするとき、迷ってしまったことがあります。

それは、雨がとても強く降っている日のことでした。その日は出かける用事があったのですが、雨の影響でまだ家に帰ることができないと、母から連絡が来ました。しょうがないのでバスを使うしかないと思い、バス停へ急ぎました。しばらくバスを待っていると、１人のおばあさんもバスに乗るため、バス停にやって来ました。

私はかなり待っていたので、「早くこないかな。」と思っていました。すると、おばあさんが「カサを忘れてしまって、すぐに取ってくるからバスが来たら少し止めておいてもらえる？」とだけ言って、カサを取りに行ってしまいました。

バス停には私しかいなかったので、私がやるしかありません。公共のものを止めるのに気が引けた私は、おばあさんに早く戻ってきてほしい気持ちや、バスがまだ来ないでほしいという気持ちでいっぱいでした。しかし、そんな願いも虚しく、すぐそこにバスが見えてきてしまいました。私は、すごく迷いました。なぜならさ、さっきのおばあさんの事情を知っているのは、私だけだったからです。

「べつにバスを止めなくたって、ばれない」という考えと「バスを止めなければ、おばあさんに何て思われるだろう」という不安がぶつかっていました。悩んでいると、ついにバスが来てしまいました。ドアが開き、乗り込むしかない状況になったとき、やっと覚悟が決まりました。

「すみません。カサを取りにいっている人がいるので、少しだけ待ってもらえませんか。」

運転手さんにことわられるかもしれないとドキドキしていましたが、運転手さんは優しい声で、「大丈夫ですよ。」と伝えてくれました。それを聞いたとたん、ホッとして全身の力がぬけました。

しばらくすると、おばあさんが戻ってきました。おばあさんは運転手さんにお礼を言うと、私がすわっている席の近くにすわり、「本当にありがとう。」と、やわらかい表情で私と目を合わせました。

この日のできごとを、私は今でも覚えています。最後のおばあさんのあの一言で、なぜあのとき迷ってしまったのだろうと、不思議でしかたありません。でも、このことがあったおかげで、困っている人がいたら、私でも助けることができるということを知り、勇気を持てました。

あのおばあさんには、私の方が感謝の気持ちでいっぱいです。